

中国雲南の神医 ドクター・ホー (和士秀)

「幸せこそ最良の薬」

取材・文 白銀みずほ

中国は雲南省麗江の山奥に、どんな病気もびたりと治してしまう仙人のような名医がいる。それを聞いては誰でも耳をそばだてる。そして、自身のからだに不具合があったり、家族や知人に病気の者があればなおさらのことである。



「麗江玉龍雪山の神医」「現代の神農」(神農とは百草をなめて中国の伝統的な医薬を作ったといわれる伝説の皇帝のこと。この神農が書き記した中医学の書物が中国最古の「神農本草経」と数多くの名声を博し、ドイツ・ベルリンの比較医学研究所がこの「神医」の研究解明にのりだしたとか、アメリカ国立ガン研究所の白血病患者が治ってしまったなどと、米タイム誌を始め世界中のメディアで紹介されてもいるという。

その名医は和士秀医師。みんなは親しみを込めて「ドクター・ホー」と呼ぶ。和医師は患者さんの別け隔ては一切しない。診療費やお薬代の話もしないから、お金を払える人が「心付け」を置いて行くだけとか。ちょっと信じられない話だが、実際にこの和医師のもとを訪ねた知人のO氏は

「自分が気になる様々な病気の薬を処方してもらって日本に持ち帰り、その素晴らしい効果に感動してしまっただ。しかも、ほんの手間賃程度のわずかなお金しか受け取ってもらえなかった」というのだ。

早々このO氏を中心に、名医探訪のツアーが組まれたのは言うまでもない。

中国国内からの手紙類はもちろんのこと英語、仏語、ドイツ語などに交じって日本語の名刺や手紙類の数もかなりある。

「おかげさまでガンが治りました」といった礼状をはじめ、糖尿病、高血圧、肩凝り、不眠症など様々な病気に「ドクター・ホーの薬が効いて良くなった」という感謝の言葉とともに「また同じ薬を送ってほしい」と綴られている。

和医師が開業して十六年、これまで訪れた患者さんの数は十数万人にはのぼるだろうという。

《長年苦しんだセンソクがすっかり治った》

「医師は患者のためにある。この身は玉龍雪山に依っているのに、どうして使うべき薬が無くなるのを憂うことがあるのか」と語る和医師。貧しい人には無料で診療し、薬も無料で処方する。

和医師は患者さんの話を聞きながら筆をとると、薬草の見立てをノートに書き付ける。それを隣で見ている

た子息の和述龍医師が、部屋に置かれたおびただしい数の赤いポリバケツの中の粉薬をスプーンですくっては調査し、紙に包み込んで患者さんに渡すというやりかた。いつも患者さんが引きも切らず、夕方まで食事も休憩も取れないことが度々だとい



心のこもった手料理どれも最高の美味だった

う。にもかかわらず、和医師の姿勢、肌をつやとにも、あまりにも若々しい。その秘訣を問うと「ハッピーネスイズ ベスト メディシン」という言葉が即座にかえってきた。私たちがそれぞれに自分のからだ

の状態や悩みを和医師に相談し、厚かましくも家族の分の薬まで処方していただいた。気が付けば、朝の十時から夕方五時ごろまで、実に六時間近くも両先生のお邪魔をしていたのだ。しかもその間に、お食事までごちそうになったのである。和医師の奥さんの手作り料理は野菜を多く使った薬膳で、どの料理も本当に美味だった。

和医師は静かな口調で話す。

「時と地の利、それと人の和に恵まれて、よい結果を残すことができたのです。私は単にナシ族の民間医療の一部を発掘したにすぎないのです」

そのナシ族の男たちはほとんど働かないのだという。そのかわり古い伝統芸能の担い手として様々な技芸に励む。診療所の隣では、村の男たちが昼間から卓を囲んで麻雀にふけていた。働かないせいか、ナシ族の男は短命だといわれている。そうした環境のなか、八〇歳の和士秀医師は異彩を放つ存在と言っているだろう。

一九九六年の麗江の大地震では、和医師の家族が総動員で村人をはじめ

め近隣の被災者二千余人の治療にあたり、また流行性疾患を予防するために大釜で飲み薬を煎じ、無料で配ったりもした。漢方の本場の中国で「最も多くの人たちに感謝されている医師」としてガイドブックにその名が載るほどになっても、和医師は全く驕ることをしない。その掲載された記事を見せてほしいとお願いすると、まるで少年のように照れながら一冊の本を差し出した。どこか愛嬌があつて、可愛らしいおじいちゃん笑顔が今でも思い出される。



料理上手な奥さんと自慢の息子さんと一緒に

和

古く約あり東の長杉又 麗江玉龍雪山の草花

井

子

郎

五の年五